

男らしさはどこでどのように形成され維持されるのか？

前スウェーデン平等問題担当大臣

Bengt Westerberg

様々な時代の異なる社会を研究した人類学者によると、異なる社会では男らしさがかなり違って表現されるということが、非常に明確になったようである。私の出発点は、厳密な科学性に基づくものではない。私は、様々な意見発表を整理し、見通しを与えようと決めた。私も伝統的な考えのいくつかを知っている。我々が知っているそれらの相違の多くは失われるだろう。素人として引き出せる結論は、我々が男らしさのせいにするほとんどのことが、生物学的理由でそうするというのは、非常にまれであるということである。もしそれが、強固な生物学的取り決めであったなら、異なる社会でのこのような相違がそこには生じなかつただろう。他方、それが社会的に決定されても、生物学的に決定されても、大したことではない。たとえそれが、生物学的に決定されなければならないことで、我々がその結果を好まなかったとしても、我々には学習能力や自己を律する能力のような他の能力がある。それは、たとえ行動に生物学的な理由があるとしても、社会的な結果が決定的だからである。

女性より男性によって成される方が良い役割はほとんどない。しかし、我々が暮らす文化や伝統のため、もちろん男女間に不平等がある。もう少し社会学的立場で社会を見ると、我々は、多くの権力が集中しているところに、多くの男性が集中していることを発見する。そのような男性の一集団は、女性やその他すべての男性より高給取である。このような相違は、しばしば文化や歴史的伝統によって決定される。そして、我々はその相違のもとで暮らし、その相違に人生を左右され、その相違のもとで働こうとしなければならない。もし我々がそのような状況を実感し、男女が様々な異なる経験をするということを認識するならば、その時、社会の方向性について決定が成される様々な場に、男女ともに参加することが重要であるとわかる。

平等な権利についての議論は、女性が中心になって行われてきた。そして、あえて 19 世紀に戻るなら、平等権獲得への道のりのすべてが女性によるものであった。説明するのはたやすい。つまり、女性は社会的に人並みの権利を与えられていなかったのである。男性には女性にない特権があった。彼らはその特権を男性に続いて得た。女性は男性の後に相続権を与えられたし、男性の後に投票権を獲得し、男性の後に政治集会への参加・開催

を認められるようになった。女性は男性の後に様々な教育や職業への道を与えられた。最後に打倒された公的な男性の砦は、職業軍人としての訓練を受ける権利だった。そのように、男女間の公的な差違は、北欧諸国では基本的に廃止されているということを、我々は比較的胸を張って言うことができるだろう。

しかし、我々皆が知っているように、ごく少しだけ、実質的な相違が残されている。問題はそれが何故かである。単に時間だけの問題であろうか？ 我々は、多くの平等の機会を導入してきたが、これはむしろ遅かったのではないだろうか？ もし我々が辛抱強く待つだけで、我々が向かう社会のどこにでも男と女を見つけるという点で、男女が平等に扱われる真の平等社会を見ることになるのだろうか？ その答えは部分的には時間の問題であると私は思う。そして、もし我々がこれまでしてきたこと以上のことをしていなかったら、今後も依然としてそれは、平等拡大のための運動でしかないだろう。

私の認識によると、それは時間の問題だけではない。男女の関係に影響を及ぼす私的領域における権力構造もある。このことを発見するまで、私は個人的に非常に長い時間を費やした。私の経験が誰かの役に立つと思うので言うのだが、実際、私にそれを理解させたものは、政府の報告書だった。多くの人々は、政府報告書を書くことが無駄であり、人々に少しも影響を与えていないと思っているので、あえて私はその人たちに言う。私は男女間の公平さを求める意味から、政府報告をもとにフェミニストになった。ある章は、ジェンダーシステムや男女間の権力配分を扱っていた。このような私的領域における権力構造は重要であり、以前の男女間に見られた公的な場での差違と同様にその是正に着手しなければならないということが、報告書によって理解することができた。

あなたが男性の権力について話すとき、多くの男性は驚いた顔をするが、それは、そんなに変わったことではない。なぜなら多くの男性は、自分が権力を持っていると感じていないからである。そしてこの権力は、たとえば男性が女性に「あなたはこれをしなければならない」と言うと、彼女がそれをするという公的権力のような、我々がしばしば権力に対してイメージする仕方で行使されるということではない。この権力はこれよりももっとずっと見えにくい。職場で例をあげるなら、我々は、しばしば男性が男性を選ぶということ、男性の基準が全体の基準として広く受け入れられているということを知っている。これは権力の一つの表現形態であるが、仕事の場面で、男性は彼が、支配的であるそのやり方を絶えず考えているわけではない。私はリーダーとして、他の男性を選ぶ男性はほんの少ししかいないと信じているし、男性を特別視すべきと考える男性は少ししかいないと思う。これに反して、彼らの多くは女性を見つけようとするだろう。しかし、それは実際にはできない。そして彼らが一人の男性を選び、結果として、商業と工業の大部分において

男性支配を維持することになる。

それは家庭でも同様である。我々男性は、簡単で単調な仕事を無視する変な能力を持つと私はよく言う。それが生物学的に決定されていると言う者もいる。我々は女性のように違う視点から見る能力を持たないし、周りを見ないばかりか、一つのことに専念し、ほかは何も見ない。簡単で単調な仕事に目をつぶるような能力を持つことは、愚かではないということを経験によって、我々は知っていた。というのは、あなたがもし十分長く眼をつぶっていたら、それは普通、消えて無くなり楽になるからである。面倒なことに目をつぶるという方法で、人は家庭での権力状態を維持することができる。これは一つの冗談でもあるが、私は誰もが自分自身の内面にあることだと思うし、人がある自由を獲得するためには、受身的であれば良いということを知っている。自由を手に入れる代わりに、家庭における実質的責任は妻に渡る。

平等の拡大は、権力配分の変化を伴うこと、そして平等の進展は、男性が女性へいくらかの権力を与えなければならないことを意味すると私は思う。権力は、原則としてあるいは少なくとも長期的には、誰もが失ってはならないので、全て、人が分かち合えるような自分たちで創り出せる製品のようなものではない。そうは言っても、ある見方に依れば権力は一定の量を持つ。それはしばしば、より多くの権力を得る者と、権力を失いつつある者を伴う。私はそれこそが平等とは何かを示していると思う。

私は最近、平等について話している我々男性三人の一人として、もう一つの会議に出席していた。私は最後であり、彼らが話していた時、私の男性カウンターパートの話を聞いていた。私は、そこで以前に考えていなかったものを発見した。私が平等についての話に加わるときに言うことと同じことを彼らは大雑把に言った。しかし、一人の男性として聞きながらそこに居たとき、彼らが男らしさをとても否定する写真を提供したことに、私は強い衝撃を受けた。彼らは男性、男性の役割、男らしさに対して、たくさんののしった。私もそのようなことを非常によくすることが、私に強いショックを与えたのである。あなたの聴衆が 80-90% 女性であるとき、男性に対して、また、とても大衆的なものに対して、ののしることはたやすい。というのは、それが平等会議でよくあることだからである。

しかし、私に強いショックを与えたのは、もし我々の前にいるのが他の聴衆、すなわち、両性の平等に積極的な興味をもたない男たちだったらとイメージすることだった。平等に関心を示してきた大学の教員、公務員、公的雇用者ではなく、「普通の男性」つまり、産業労働者、初級公務員、産業指導者の人たち。もし彼らがこれを聞いたら、彼らはどう反応するだろうか。私は、彼らの反応がとても否定的であるだろうこと、男性が攻撃されるとこの話の流れは、平等に関心をもつ男性を得るのを非常に難しくしている理由の一つ

ではないかと思う。

この戦いに、より多くの男性を得ることがより多く重要になるし、我々は男らしさが良くも悪くもあり、女らしさが良くも悪くもあることを理解し始めるべきである。女性と女らしさと同じように、普通我々が男性に帰属させてきたこのような特権や表現方法を私は男らしさという言葉で示す。だから、時々男性の攻撃性は暴力を招き、我々は非常に危険であると認識することが重要である。しかしその同じ男性の攻撃性は、社会が前進しなければならない時に良いものとなるような勇気となったり、危険を負うことに転化することもあるだろう。同様に、女らしさにおける良い点は、継承することもできるし、また否定的効果を持つこともありうる。平等への努力にもっと男性が参加してほしいと我々が思うならば、もっと釣り合いのとれた男女の考え方が重要である。

数年前、ここスウェーデンである本が出版された。それは最初ノルウェーで刊行されたが、男性の生活状況についてのものであった。明日ここに来る予定である著者の Helene Aarseth と Øystein Gullvåg Holter は、彼らが調査を通して出会った男性の様々なタイプを描いている。これらの男のタイプは、実生活にめったに存在しないが、彼らは男性に面接した時、様々な違いがあることを見つけた。それらのタイプの一つはまさに真の男性のタイプである。今、当然ここにぴったりの男性という人が数人はいるだろう。彼らは、男女に対して公正さを要求することが、平等に対して努力するのに十分な基盤であると信じている男性たちである。その平等を認識している男性は、必然的な結果として、女性に権力を委譲する男性を生み出す。それが公正であるので、彼らは権力を渡すための準備をしている。

19 世紀の貴族の中には、一般民衆のために権力を失うことになるだろうと知りつつ、先に延べた公正さ故の権利委譲という基本的に同様の主張で、普通選挙制のために戦った者がいた。真の男性の例をあげれば、その妻が言うような内容のものである。すなわち、今や我々には一人の子どもがいる。当然我々は産休を分かち合おうと思う。と妻が言い、「もちろん」と彼は言う。しかし、それが彼らの仕事と育児の両立のため公平な解決だということを彼女が既に知っていることを彼は心の奥深くで残念に思っている部分がある。しかし、彼女の見解に明白で公正な理由があるので、彼は何も言わない。しかし問題は、多くの男性を納得させるのにこれが十分であるかどうかである。私は、男性である我々も同じ様に、積極的に何かを提案しなければならないだろうと思う。

私が既に言ったように、平等促進に努力したので、女性は最大の進歩を遂げた。物質的利益、より多くの財政的自由、より多くの独立などである。しかし、平等が実質的な利益を男性にも与えるだろうことを、男性はこの長期間に見い出してこなかったことが明白で

ある。しかし私は、最新の仕事を分けてもらえるような女性を見い出すことが、どんなに難しいことかを未だに多くの男性が感じていると思う。女性はしばしば二つの仕事を持つ。女性には職業と、家や子どものための主要責任がまだあるということである。しかし、このような二つのきつい仕事から積極的な面が現れてきている。今日、誰かが言っていたように、丸ごとの人生を生きていく可能性である。片足を生産労働生活に突っ込み、再生産すなわち育児にもう片方の足を入れることである。Holter と Aarseth による調査で数人の男性が、この考え方を言い出した。彼らはそれを「ケアマン (care man) : 世話をする人」と呼び、その男性は子どもに対する世話と親密さを拡大させるために積極的に働く。

これは新しい現象ではない。10 年前、既にある男らしさに関する報告が書かれている。スウェーデンの調査者 Margot Bengtsson と Jonas Frykman は、スウェーデンで男性についてのもっと多くの調査を活発に行うようにしたかった。その報告で Bengtsson は、彼女が面接した数人の若い人たちの夢やしたいことについて語っている。Bengtsson は「私にとって、仕事が全てではなく、仕事と家族の両方が大切」と言う若い女性と同様のことを強調して言う若い男性にも会っている。両立させるのは難しいだろう、しかしもし丸ごとの人生を送りたいならば両方が重要なので、それは行われなければならないと私は理解している。

平等は、男性を女性のようにしたり、女性を男性のようにするというような中性化するといった議論ではない。男性のような女性は近頃珍しいことではない。しかし、そのことについてはフランス人作家の Elisabeth Badinter が非常にうまく言っていると思う。そして『男のアイデンティティに関する XY』という彼女の著書のある章を引用することで、私のスピーチを終えたいと思う。

たやすく、自由や平等を受け身で入手するのではなく、きつい労働や自分自身を変える要求に応えるような良い男性の特性を認めようとし始める時代が来ている。その特性とは、セルフコントロールであり、その人自身の限界を超える願望であり、危険と挑戦の経験であり、圧迫への抵抗であるだろう。それらは創造と威厳のために欠くことのできないものである。それらは女性の美德と同様、あらゆる人の権利である。最初に良い男性の特徴は北欧で広がり、後の人たちがそれらを維持する。特権は、相互に両立しないどころか、男性が人間らしく生きるために、強固に統一されなければならない。

(松井幾子)